

マフテック松崎社長「1600度に耐える繊維素材、EVや製鉄所にも」 – Leader's Voice

2026/02/25 11:00 日本経済新聞電子版 1024文字

自動車向け高耐熱素材大手のマフテックは、内燃機関車向け以外への製品展開を強化する。排ガス処理装置向けの素材でシェアが高いが、中長期ではエンジンを搭載しない電気自動車（EV）の拡大も見込まれる。内燃機関車向けの一本足打法から脱し、事業を拡大する戦略を松崎耕介社長に聞いた。

——製造する高耐熱素材は何が強みで、どのような使われ方をしていますか。

「手掛けている結晶質アルミナ繊維を使った素材はセ氏1600度まで耐えられる。高温に耐えられる素材は固いものが多いが、繊維を編み込んだクッション性のある素材で柔らかいのが特徴だ。新潟県と香川県の2カ所で生産している。2022年に三菱ケミカルホールディングス（現三菱ケミカルグループ）から分社、独立した」

「売上高の約9割が内燃機関車向けで、高温になる排ガス処理装置内の保護材向けが主力だ。装置内の浄化機器システムを走行中の振動から守り、排ガスが漏れないようにするための保護材として使われる。高温に耐えられクッション性があるという特徴が、用途にぴったりとはまっている」

——エンジンが使われる内燃機関車や排ガス処理装置向けの需要の先をどうみますか。

「数年前と比べるとEVの成長は鈍化していて、当時と比べると追い風は吹いている。排ガス規制は厳しさを増しており、浄化装置の個数は増え保護材が使われる量も増えている。建機やトラックにも使われるため、2030年ごろまでは大きく需要は減らないとみている」

「ただその後に向けて内燃機関車以外の用途を開拓することが必要だ。どのような用途に使われているか、需要があるかをより把握するために営業の人員も増やしている」

——具体的にどのような用途へ展開していきますか。

「例えば車でもEVの電池向けにも使える。電池が燃えてしまった場合に居室を守るための遮炎材となり、実際に採用されている事例もある。EV以外で使われている電池向けにも展開できるだろう」

「他には製鉄所で鉄鋼製品を運ぶ加熱炉内の柱向け断熱材としての需要も見込む。軽くて施工時間も短くでき、加熱炉のエネルギーロスも削減できる。将来的には内燃機関車向け以外の売上高の全体に占める割合を現在の1割程度から3割程度へ高めたい」

（聞き手は岡田江美）

松崎 耕介氏（まつぎき・こうすけ）84年（昭59年）京大工卒、日本アイビーエム入社。2015年シュナイダーエレクトリック代表取締役。20年フジシール社長。24年から現職。茨城県出身。65歳。

【関連記事】

- ・三菱ケミG、水性樹脂材料事業を売却 接着剤大手のコニシに
- ・三菱ケミG、中国影響で製鉄用コークス撤退 850億円損失計上へ
- ・三菱ケミカル・旭化成、水島のエチレン生産停止へ 三井化学拠点に集約

許諾番号NK002142 日本経済新聞社が記事利用を許諾しています。

本サービスで提供される記事、写真、図表、見出しその他の情報（以下「情報」）の著作権その他の知的財産権は、その情報提供者に帰属します。

本サービスで提供される情報の無断転載を禁止します。

本サービスは、方法の如何、有償無償を問わず、契約者以外の第三者に利用させることはできません。

Copyrights © 日本経済新聞社 Nikkei Inc. All Rights Reserved.



マフテックの松崎耕介社長